

Challenge by Choice とは何か？

その概念からみる「選択」と「チャレンジ」の意味とは

—CbCをどのように現代に活かしていくことができるか—

What does “Challenge by Choice” mean? or why do we need reflection for “choice” and “challenge” with deep thought? : To consider how the effect of the adventure philosophy adapts into our modern society

村井伸二

Shinji Murai

キーワード：チャレンジバイチョイス、強いられるチャレンジ、アウトワード・バウンド、プロジェクト アドベンチャー

Keywords：Challenge by Choice, Impel into Challenge, Outward Bound, Project Adventure

1. はじめに

新型コロナウイルスが世界的に蔓延し続けている昨今、人々の行動が制限されている。「不要不急」や「自粛」という言葉が飛び交い、自ずと何かに「挑戦」することは悪いことであるかのような思考に押しつぶされてしまいそうになる。また、SNSなどでは様々な誹謗中傷などの情報が流れ、さらに事実と異なる多くの「フェイクニュース」なども含まれたものが行きかっている状況である。ノーベル平和賞受賞のドミトリー・ムトロフは世界に蔓延しているフェイクニュースに危惧を提示し、ジャーナリストは「真実とフィクションを見分ける責務がある」と述べている（日本経済新聞¹⁾。このことは我々が情報の受け取り側として、何が真実であるかといった適切な情報を「選択」する能力が必要となってくることが示唆される。

さらに、コロナ禍の学びの環境、つまり「教育」に焦点を当ててみると、山内（2021）はコロナ禍の教育について「教育界に大きなインパクトを与えたのは、2月27日に安倍首相が表明した全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校への臨時休業要請である。この影響もあり、3月には多くの大学で卒業式の中止・縮小が行われるとともに、4月からの授業開始延期があいついだ。」²⁾としている。一斉休校後、半年以上経つ今現在においても、朝岡（2021）は一斉休暇に対して世論調査の半数以上が正しかったとしている一方で、子ども感染経路のほとんどが家庭からであり学校ではないことが明らかになっていることを指摘した。このように「学ぶ」権利が制限された「学校一斉休校は正しかったのか」ということに対して適切な議論と検討が必要であることを提示している³⁾。

この混沌とした現代においては、より一層我々が「自主性」を持ち、自らの「意思決定」や「自己決定」つまり「選択」して行動し社会参画することが求められる。

『選択の科学』の著者シーナ・アイエンガーは「わたしたちが「選択」と呼んでいるものは、

自分自身や、自分の置かれた環境を、自分の力で変える能力のことだ。選択するためには、まず「自分の力で変えられる」という認識を持たなくてはならない。」⁴⁾と述べている。

また、『子どもの参画』の著者であるロジャー・ハートは「子どもたちの参画のはしご」として、非参画から参画を段階的にはしごに見立てた。その最上段に値するところは「子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する」⁵⁾と表している。

長引くコロナ禍において、子どもだけでなく成人も含めて自分の環境をネガティブな状況として捉えるのではなく、ポジティブに変革し、主体的に社会参画していく意識や行動、そしてこれに必要なスキル獲得が必要不可欠だと言える。

まさに、今以上にこの困難といえる時代の中において「選択」と「参画」が重要視される瞬間はないのではなからうか。

TAPでは常日頃からAP、つまり“Adventure”の要素を活用し、子どもや成人における参加者の自らの可能性を信じ、選択からチャレンジすることで個々と集団の変革であり、学修と成長を獲得していくのである。

APを実施していく上で代表的な概念として、Challenge by Choice (CbC) というものがある。このCbCは「参加がチャレンジしていく中で参加レベルを自ら決定する」というとても哲学的な原理がAPの中で尊重されている。この概念を上手く活かしながら個々と集団の目標達成の支援のためにファシリテーターはCbCを活用していく。

また、“Play Safe”である安全（身体的・精神的）に活動を実施していくことにおいても、APでは強いられた環境の中で参加者は自分がComfort-zone(居心地の良い環境)から一歩踏み出し、学びや成長に気づいていく。つまり、Stretch-zoneやLearning-zoneへと達する。しかし、あまりにもチャレンジレベルが高すぎるとStretch-zoneやLearning-zoneを飛び越えて不安や恐怖といった“Panic-zone”へと陥ってしまうことがあるので防ぐ必要がある。すなわち、CbCは自らを認識し「選択」による「挑戦」をしていくことに、Adventureを自分のチャレンジレベルとして捉えることに意味がある。そのためにもCbCはとても効果的かつ、有効な概念の一つであると言える。

また、James NeillはCbCについて「Full Value Contract (FVC) (お互いの価値を最大限に尊重する)の一部として理解され、集団の文化形成や活動の参加レベルに関して個々の選択に関する権利を尊重することを助けるものである。」と述べている⁶⁾。

つまり、CbCはAP活動に参加する上で、自らの「選択」に関する「権利」が前提であることが理解できる。FVCとCbCは融合体と捉えられ、CbCはそれだけでは成り立たないとも言えないことはない。本稿では文字数に制限があるためCbCと共に重要なFVCではあるが割愛する。

改めて、APにおける安全な実施において重要かつ不可欠な概念であるCbCについて焦点を当て、概念の背景の歴史的概観について先行研究をまとめながら解説することを目的とする。また、このことによって西洋で派生したこの概念が我が国の文化背景も含めてどのように応用されるべきか事例を交えながら検討する機会としたい。

2. “Challenge” と「チャレンジ」の意味について

本稿は語学的な英語解釈の意味合いについて検討することを目的とはしないが、西洋的概念であるCbCについて和訳を含めた解釈をする際には注意が必要である。

メイヤー (2015) は諸外国の言語と歴史を踏まえた相互作用の理解として「ハイコンテキスト」と「ローコンテキスト」という捉え方を示している。「ハイコンテキスト」として特に日本語は状況によってどのように使われるかという様々な意味合いを持つ。よって、言語などを用いてお互いのメッセージを汲み取る能力に長けているものである。それに対し、「ローコンテキスト」は特にアメリカ人のように、メッセージを伝えたいと考えたときに、できる限り明確に伝えようと心がけるとして両者を対照的なものであると明らかにしている⁷⁾。

このように歴史・文化背景を考慮すると、西洋言語が日本語として返還されているものを解釈する際は、このような「コンテキスト (文脈や環境)」の相違を踏まえて相互理解に努めなければならない。

また、武藤 (2018) は認知症における研究や実践領域で使用される「チャレンジング行動」について、英語概念の“Challenge”という用語を和訳で使用されるチャレンジとを比較しながら含意している。チャレンジの意味について「(前略) ① “challenge” という英語は「挑戦する」という意味ではなく「挑戦へと誘いかける」という意味である、そのため、②英語の“challenge”と日本語の「チャレンジする」とでは主体が逆転する、また③“challenge”の語源は「非難、誹謗、中傷」であり、派生して「物事の『事実』や『正当性』などを疑った場合、相手に立ち向かって異議を申し立て、非理を決定するための『対決』を申し込む」という意味となった、となるだろう。」⁸⁾と述べている。

英語といった概念を翻訳して使用する際には意味合いに注意して解釈したい。そして、我が国では主に日本語で行われるTAPの中において、ファシリテーターが「チャレンジ」、「挑戦」という言葉をプログラム中に連呼する。つまり、ファシリテーターが参加者の個々や集団が各々の目標に向かっていくための支援をする際、「チャレンジ」の意味合いの誤解を参加者に与えてしまうことだけは避けたいものである。このような和訳解釈の意味合いを含みながら、アドベンチャーの要素としての「チャレンジ」について考えてみる必要がある。

Milesら (1999) は「Adventure Education (AE) は個々と集団における「チャレンジ」、強度のアドベンチャー、そして、新しい成長体験などといったことから起こりうる「変化」が前提とされる」⁹⁾としている。また、Priestら (1997) は「「チャレンジ」は不確かなことを解決するために、リスクある環境に対して個々の能力に応じて努力しながら従事することで成り立つ。」¹⁰⁾とも述べている。このことから、アドベンチャー教育やAPにおける「チャレンジ」には、ただ何かに挑戦するといった意味合いだけでなく、困難な状況に努力を惜しまず挑戦し、そしてその結果に成長するといった教育的な成果が含まれる。

Schoelら (1988) は「チャレンジとは今までの方法を乗り越え、そして自分を新しい領域に押し立てるもの」であると表している。また、「予期されるリスクや「不可能だと思ふ課題」といった身体的に要求されるものがアドベンチャー体験にとって重要となる。」と記している。

チャレンジコースを初めて見たとき、参加者 (児童から成人までの) たちは「こんなの無理！」と第一声で発することはファシリテーション中、予想範囲内の言動であろう。しかし、「APが適切にグループプロセスといった段階を踏んでいくと同時に、チャレンジ体験における成功に向けて向上していく。」¹¹⁾とも述べられているように、APにおける参加者が「チャレンジ」体験を通じて不可能だと思ふ課題について、いかに自らの“Comfort-zone”から一歩を踏み出しながら、個々と集団がStretch-zone及びLearning-zoneといったところに達することができるかが重要となる。

TAPではこの「チャレンジ体験」というものを効果的に活用し、参加者が達成感という成功体験を重ねながら、自らのComfort-zoneを拡張させていく。故に、この成功体験が個々だけでなくグループやチームといった集団形成とともに目標達成に重要であると捉えている。

3. Challenge by Choiceについて

先ほどの武藤が述べていた“Challenge”の語源から派生した「物事の『事実』や『正当性』などを疑った場合、相手に立ち向かって異議を申し立て、非理を決定するための『対決』を申し込む」の中で使用される「異議」や「対決」といった強い意味合いが感じられる。しかし、APの中での「チャレンジ」は「努力」や「成長」といった教育的要素が含まれていることは既に述べた。そこにはAEやAPに尽力した先人たちの経験と知恵から生まれた概念が存在する。

「CbCの原型といったものはKarl Rohnkeに提唱された。また、CbCでは役職的なリーダーという意味ではなく、参加者においてチャレンジレベルを決断する選択について、権限を与えられるものであるとしている（Priestら, 1997）。¹²⁾とあるように、APの活動において、参加者がどういったチャレンジレベルであるかを自ら選択する権限を持つのである。

ただし、このCbCの意味合いの捉え方において困難を要する場合がある。なぜならば、参加者が選択権を持つことになると、参加に積極的でない参加者にとってはとても都合の良い解釈ができるからである。つまり、「この活動には興味がないので参加したくない」という参加者（ここでは生徒や学生）がいるとする。その際には概念上「やりたくないならやらなくてもいいよ！」と間違ったメッセージを発してしまうことになりかねない。

例えばTAPにおいて他の仲間がチャレンジコースを積極的に参加している中で、その横で座って見ているといった場面を想像してしまう。これではただチャレンジを拒否するだけでなく、自らがどこまでできるかといったComfort-zoneを踏み出そうとするチャレンジ体験を奪いかねない。

ここで特筆することは、CbCでは活動に参加する「やる」、「やらない」といった二元論として安易に捉えるべきではないということである。Schoelら（2002）は「CbCは参加者がチャレンジレベルを選択することであり、「チャレンジ」を避けるという意味ではない」とも表している¹³⁾。

ファシリテーターは常に参加者の感情（Affect）、行動（Behavior）、そして認知（Cognition）といった相互関係や他の仲間との関係性といった様々な情報をくみ取りながら（GRABBSS評価）*1適切な方向へと導きだしていく。また、本来ならば、参加者がこの活動において「やりたくない」、「できない」といった判断において、ファシリテーターはこの参加者は本当にできないと思っているのか、それともできるのにただやりたくないと思っているのかに対して、参加者との関係性を含めて「信頼」を持って受容したいと考える。つまり、ファシリテーターにおいても常に「選択」というものがあり、その後のグループの発達段階や目標達成において影響を与える可能性がある。すなわち、ファシリテーターにおいても適切な判断におけるCbCを理解し、活用する「CbCスキル」のようなものがとても重要となってくると言える。

4. Challenge by Choice を取り巻く連続的な概念とは

前述したCbCの意味が唱える「チャレンジ」や「選択」の概念には、様々な文化背景が関係していると言える。さらに、これからCbCを巧みに活用しAPを実践していく上で、時代背景も加味しながら持続可能なものとして、実践研究し続けなければならないと著者は考えている。それにはCbCを取り巻く時代背景や、さらにそれに似通った様々な概念と比較しながら検討していく必要がある。

James NeillはProject Adventure (PA)^{*2}などで提唱されてきたCbCの対称として、“Impel into Challenge” (IiC) (強いられるチャレンジ) を挙げている。このIiCはOutward Bound (OB)^{*3}の創設者でもあるKurt Hahnが戦中の背景を基に、当時の近代的生活を背景に弱体化していったと取られる青年には「強いる」ということが教育における責任であるという理念が源となっている¹⁴⁾。

また、IiCよりも更に「強制」の意味合いが強い矯正教育の中で遠征プログラムもしくは少年院に行くことを選択するといった“Forced Choice” (強制された選択) やさらに強い意味合いとしてブートキャンプ (軍隊式キャンプ) といった“Force into Challenge” (強制されるチャレンジ：つまり選択は認められない) といった状況に応じた「選択」や「チャレンジ」について図を用いて解説している (図1)。



図1 参加するレベルについての連続体概念図 (James Neill Challenge by Choice より)

さらに、このIiCといった概念を踏まえながらも、何故CbCといった捉え方が派生していったのかについて、James NeillがCbCの経緯について記述している。

「Karl Rohnkeは3年間をOBのインストラクターを行い、その後にPAの創成期のスタッフであった彼は造語としてCbCを提唱した。なぜならば、彼は都会の学校におけるAPに抵抗する青年たちを見てきた。Rohnkeは元々強いるチャレンジを行っていたOB活動に違和感を得ていた。彼は意を決して「強いる」ことから生徒たちに「選択」することを提示した際、彼は解放された感覚や自由を大いに感じる事ができた。このCbCといった哲学的な変化はその後のPAの仲間と共にクリエイティブなグループゲームの創造へと掻き立てたのではないだろうか。」¹⁴⁾

さらなる発展的概念として、CbCをベースにしながらもStanchfield (2016) は“Challenge AND Choice” (CAC) について言及している¹⁵⁾。彼女は個々の参加者自身が選択やコントロールできることを強調している。また、このCACという概念は、参加者同士において、その日の感

情から影響される言及や身体能力、強さ、過去の経験などを通じてどのように選択しチャレンジするかといった認識に役立てられる。そのことから参加者自らがコントロールでき、かつ選択できる状況次第によっては熟考されたファシリテーションと共にポジティブな結果を生むと考えられる。

この表現から見えてくることは自らがコントロール、つまり自己操作力を活かしながら選択すると同時に、チャレンジすることが同等に重要であることを強調しているのではないかと推測できる。それにはファシリテーターは常に自らが自由に自分を表現し、選択しやすい環境作りが重要になってくる。そこにはファシリテーターの言及や態度、そしてモデリングとなる行動など様々な要因が関わっているのではないだろうか。

このことから、時代背景に沿った社会的課題に対して哲学を持ったOBやPAといった団体が存在し、それぞれの理念や概念的なものを作り上げて教育的に成果を上げてきた経緯が理解できる。

では、我々教育者はAPをどのように理解し、そして現代や未来に対してどのような課題定義をし、この図のような概念を選択するのか。それとも西洋的概念を基にしながら我が国の言語や文化背景を鑑み、Stanchfieldが述べていたようなCACといったような新しい概念を創造しているか否かは我々ファシリテーターの「選択」に委ねられているのではないだろうか。

5. Challenge by Choice をどう活用していけるか

本稿ではCbCについて、そしてこの概念を取り巻く歴史的背景や経緯、また他の団体が捉えている連続的かつ関連性がある概念を紹介してきた。

では、これらの概念をどのように実践に取り入れていけば良いのであろうか。ここでは様々な状況に置いてのCbCの捉え方を事例と共に紹介しながら具体的な活用方法について解説してみたい。

【野外教育】

野外教育では自然環境のフィールドに飛び出し、様々なアウトドア活動を通じて学びながら成長していく。チャレンジコースといった施設環境で実施されるのとは異なり、山、海、そして川などの多様な自然環境（天候、地形、そして季節等）によって、ファシリテーションや指導方法が変わってくる。つまり、CbCの方法も異なってしかりなのである。

Proutyら（2007）は「地形や天候といった自然環境に支配されるチャレンジレベルよりも施設をベースにした環境の方がCbCを受け入れやすい」¹⁶⁾と述べている。つまり、野外教育での活動において、多様な状況、条件下に応じて適切にCbCを取り組んでいかなければならない。

例えば、グループで登山を行う際は事前に地形や当日の気象情報を吟味し、プログラミング計画、実施される。しかしながら、天候が急変することが多々あり、通常の登山道も天候や気温の変化によって参加者の疲労度にも影響を及ぼす。その際にCbCをどのように取り組んでいくかが課題となる。「生徒もしくは参加者は集団の仲間の決定する価値について尊重しなければならない」とあるように、登山時間やそれぞれの体調などを踏まえながら個々の決断（休憩するのか、それともリーダーを変えるのか、途中で引き返すのか）を行いながら活動が成されていく。つまり、参加者は活動において身体的・精神的に苦しくなりながらも常に選択と決断を迫られること

がある。大自然と対峙しながら自らの選択（登頂できる、もしくはできない）で活動を終了した際の参加者各々の達成感は計り知れないものである。



写真1. カナダ野外教育演習

【チャレンジコース】

TAPで行われるチャレンジコースの活動において、参加者がCbCを具体的な行動や言動として表わせられるかがカギとなる。村井（2020）は学校教育におけるTAPと特別活動の共通性として、チャレンジコースにおけるCbCの事例を挙げている。

「TAPで行うハイチャレンジコースは高さ7、8mの場所にクライミングギアを装着し、仲間のサポート（万が一落ちた場合に参加者とつながっているクライミングロープを操作し、安全を確保する）を得て参加者はチャレンジを行う。素早く登っていく参加者もいれば、中には最初の梯子を登った段階で身体が震え、かたまってしまう参加者もいる。ある参加者は梯子の上に差し掛かったときに「降りたいです。」と下に戻ってきた。時間を経て、その参加者が「やらせてください！」と果敢にチャレンジを再開し、自分の目標を達成した。もし参加者が自分で降りたいと明示した際に、ファシリテーターが強要していたら2度目のチャレンジはなかったかも知れず、参加者自ら達成したという成徳感¹⁷⁾は得られなかったかもしれない¹⁷⁾。」

チャレンジコースで活動をしていると、このような事例と似通った体験と良く出会う。ファシリテーターはこの瞬間を逃さず観察し、参加者は後に自らの選択やチャレンジについて他の仲間と振り返ることによって成徳感や達成感へのプロセッシングを理解することで、その成果を共有することができる。

このことからCbCがAPにおいてパワフルでポジティブな要因となり、参加者や他のグループの仲間たちと同時にCbCで得た気づきや学びから得られた成長を日常生活に応用していくことを更に目指し、学びを継続していくのである。



写真2. ハイチャレンジコース

6. まとめ

本稿ではAPで核となる概念の一つとして、CbCに焦点を当てその意味やその類似し、対称となる概念などについて触れてきた。また、いかに活動に取り組んでいけるかの事例も交えて検討してきた。まとめると次のようになる。①「チャレンジ」には西洋的な文化背景を含んだ意味があり、日本語の「挑戦」と活用する際には注意が必要である。②APにおける「チャレンジ」には変革や成長といった教育的要素が踏まえられていること。③CbCは自らのチャレンジレベルを選択する権限であること。④CbCは「強いられる」選択といった時代背景や目的が異なる団体などの経緯を踏まえて確立されたものであること。⑤CACのようにこれからの時代、文化に合致するCbCを創造していくことが可能であること。

APにおいてはこれから引き続きCbCの存在価値は高まっていくことは間違いないであろう。それにはAPだけでなく付随して他の教育分野において「選択」と「チャレンジ」について注目されていって欲しいと願っている。

アイエンガー（2010）はアメリカ人と日本人の大学生の100名を対象に紙を1枚用意しておもて面には「人生の中であなたが自分で決めたいこと」、そしてうら面には「自分で決めたくない、まただれかに決めてほしいこと」について回答してもらった。その結果、アメリカ人はおもてに「仕事」、「済む場所」、「だれに投票するか」といった内容が多く記されたのに対し、日本人はうら面に書かれた項目数はアメリカ人の2倍であった。このことからアメリカ人は自分で決めたい、日本人は誰かに決めて欲しいという傾向があることが調査から明らかになった¹⁸⁾。

「個人主義」や「集団主義」といった文化背景もあろうことは考慮されなければならない。しかし、APが西洋から伝わり、そして全人教育の実践として実績を積んできたTAPがこれからも発展し続ける上で「選択」や「チャレンジ」が教育において重要であることは明らかであり、今後とも主張し続けられるべきであろう。

また、この多様な文化を理解しながら我が国なりのCbCを創造していくチャンスでもある。TAPはそのミッションを遂行し、新たなCbCの概念構築としてのフラッグシップとなっていくことが可能であり、求められることとなろう。

コロナ禍は引き続き新たな波を迎えるかもしれない。つまり、VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）時代は更に続いていくのである。このチャレンジングな時代だからこそ、TAPを通じて自らが「選択」し「チャレンジ」できる人間が育っていってくれることを切に願う。

【弔辞】

Challenge by Choiceを提唱し、世に浸透させただけでなく、多くのユニークなアクティビティやチャレンジコースを作り上げていただいた故Karl Rohnke氏（1937-2020）に感謝と共にご冥福をお祈りしたい。

【注釈】

- *1: GRABBSS (Goal (目標)、Readiness (準備)、Affect (感情)、Body (身体)、Behavior (行動)、Stage (グループ状態)、Setting (文化背景)) の略でファシリテーターがこれらの項目を評価しながらアクティビティの選定やグループの発達段階を考え支援していく。
- *2: Project Adventureは1971年にアメリカ、マサチューセッツ州ボストン近郊の学校を中心に発展していった。様々なAPを活用した人材育成や研究事業を展開する非営利団体である。日本にはProject Adventure Japanがあり、チャレンジコース建設やファシリテーションのトレーニングなどを展開していると同時にTAPとも協働している。
- *3: Outward BoundはKurt Hahnによってイギリスに創設された冒険プログラムであり、戦時中の身体的を中心にした青年強化の目的とされた。このOBは世界35国で実施されている。Kurt Hahnが設立や発足に携わったRound SquareやInternational Baccalaureateは玉川学園にも取り組まれている。

【引用文献】

- 1) 日本経済新聞「ノーベル平和賞・ムラトフ氏 偽ニュース拡大危機感」2021年11月13日、朝刊
- 2) 山内祐平「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」名古屋高等教育研究、第21号、2021年、pp. 5-25
- 3) 朝岡幸彦・岩松真紀「第I章 学校一斉休校は正しかったのか」水谷哲也・朝岡幸彦 編著、阿部治・朝岡幸彦 監修『持続可能な社会のための環境教育シリーズ [9] 学校一斉休校は正しかったのか?』筑波書房、2021年、pp. 31-33
- 4) シーナ・アイエンガー『選択の科学』文藝春秋、2010年、p.23
- 5) ロジャー・ハート『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年、p. 42
- 6) James Neill, *Challenge by Choice*, https://challengebychoice.files.wordpress.com/2008/02/challenge_by_choice.pdf (2021年11月10日閲覧)
- 7) エリン・メイヤー『異文化理解力 相手と自分の真意がわかるビジネスパーソン必須の教養』英治出版、2015年、pp. 56-62
- 8) 武藤崇「なぜ日本人には「チャレンジング行動」という用語の理解が難しいのか—認知症のBPSDに対する介入におけるパラダイム・シフトの核心—」心理臨床科学、第8巻、第1号、2018年、pp.31-38
- 9) John C. Miles, Simon Priest (1990) *Adventure Programming*, Venture Publishing, Inc., p.111
- 10) Simon Priest, Michael A. Gass (1997) *Effective Leadership in Adventure Programming*, Human Kinetics, p. 45
- 11) Jim Schoel, Dick Prouty, Paul Radcliffe (1988) *Island of Healing A guide to Adventure Based Counseling*, Project Adventure, Inc., p. 130
- 12) Simon Priest, Michael A. Gass (1997) *Effective Leadership in Adventure Programming*, Human Kinetics, p. 175
- 13) Jim Schoel, Richard S. M aizell (2002) *Exploring Islands of Healing New Perspectives on Adventure Based Counseling*, Project Adventure, Inc., p. 14
- 14) 前掲書 6)
- 15) Jennifer Stanchfield (2016) *Tips & Tools for the Art of Experiential Group Facilitation*, Wood N Barnes Publishing, p. 71
- 16) Dick Prouty, Jane Panicucci, Rufus Collinson (2007) *Adventure Education Theory and Applications*, Human Kinetics, p. 41
- 17) 村井伸二「特別活動とTAPにおける集団活動の共通性」工藤亘 編著、川本和孝、村井伸二、山口圭介 著『アドベンチャーと教育 特別活動とアクティブ道徳教育』玉川大学出版部、2020年、pp. 124-125
- 18) 前掲書 7)、pp. 73-74